

第2章 長野県単独開拓団

がどこにいるだろうか。自分のことはどうしても諦めがつく。しかし、死んだ人や、年とって世間が何といても訴えのできない人と思うとたまらない。軍人なら戦地加算もついで恩給にもなる。復員しても大手をふって歩けた。それなのに国策だから平和の戦士としていてくれと、さんざめめたはずなのに、裸になって、いや、妻を残し、子を失い、仲間を死なして、切なく復員した開拓民は、悪い事でもしてきたかのようにさげすまれ、生命を削ってシベリヤに抑留されたその間の加算どころか、日当もない。おれは何か書けと言われたが、どうしても筆がすまなかった。しかし、誰かが訴えなければいけない。あの悲惨な開拓の歴史を、また、国や送出の責任者のとってきた實際を後々の世に伝えて、平和への願いを果さねばならない。そう考えてペンをとった。

この団も年配の人が多かったから、昭和二十一年十月末には、引揚げたものもかなりいたし、二十三年十月には、シベリヤ抑留の仲間もほとんど復員したが、二、三の者が内地開拓に参加しただけで、各人おもしろい身よりを頼って再起の道を歩いていた。

昭和三十年頃に村上団長が中心となって、団の同志会も結成し、開拓自興会長野県支部の諸事業や行事にも協力してきた。しかし、生きるに精一ぱいの時期には、ただ戦争が憎く、また、敗戦後の混乱の中での苦しみだけが頭にこびりついて、仲間がよるとその話題でもちきりであった。ようやく足場も固まり、慰霊の行事も回を重ねるにつれて、生涯拭い去ることのできない戦争への憎しみは、それはだれがしでかしたのか、仲間はずれ非業の最後をとげたのか、殺したのは、それは中国人ではなく紛れもなく日本帝国主義者であったということを知った。

中国残留者 待望の日中両国の国交が正常化されると、昭和四十九年には中国残留者の里帰りもはじまり、各団では

現地墓参、友好訪中もすすめられている。こうした中で、向山一雄<sup>大正五
一年、中</sup>や植田正子<sup>大正八
一年、中</sup>八生<sup>大正一
四年、中</sup>岡石<sup>大正一
四年、中</sup>子<sup>大正一
四年、中</sup>二<sup>大正一
四年、中</sup>らの現地残留や一時帰国者は、苦しかった思い出をつづっているが、また、中国での楽しい正月風景や人間愛など、中国で温かく見守ってくれた中国人のことなども語りながら、この団の仲間も近く訪中する、その日を待ちこがれながら、日中友好こそ、永久に中国の土に眠る故人への最上の慰めであり、生きている仲間のつとめだ同志会では決意し、残留者との交流を重ねている。

付記 元団基幹先遣隊長で農事指導員岡正<sup>大正五
一年、中</sup>上伊<sup>大正五
一年、中</sup>那<sup>大正五
一年、中</sup>郡<sup>大正五
一年、中</sup>の白鳥儀八郎

の遺稿と元団員・家族の、小笠原吉治・松沢政文・宮下泰之・向山一雄・植田正子・岡石子・浦野しげみらの手記を参考とした。

19 第十一次苗地伊南郷開拓団

団員は、上伊那郡南部の赤穂町ほか、八か村の出身者で、昭和十七年四月十七日、興安省阿榮旗苗地房子地区に入植し、苗地伊南郷開拓団と称した。

次別	第十一次(昭和十七年)
名称	苗地伊南郷開拓団
入植形態	分郷集団移民
入植式	昭和十七年四月十七日

第3節 分郷開拓団

所在地 興安東省阿榮旗苗地房子地区

送出母体 上伊那郡南部九か町村、赤穂町・宮田村・上片桐村・伊那村・中沢村・飯島村・七久保村・片桐村・南向村の町村長会によって組織された。苗地伊南郷開拓団の送出本部

終戦時の人員 七一戸 二五六人

入植までの経過

たった三人の基幹先遣隊 昭和十六年春、上伊那郡の町村長会は、郡下の三地域から、三つの満州開拓団を送り出すことを決定した。

すでに政府は、満州開拓は東洋平和の礎石を築く大業として、国を挙げて歌に映画に劇に、学校でも職場でも盛んに唱えられ、巷のボスターは、凛々しい青少年義勇隊の姿を描いて、人びとの目を惹いた。建設本部は郡町村長会長の伊那町町長八十吉が本部長をつとめ、県からは専門の担当係官が向出して采配を振った。南部地区は赤穂町を中心とし、中沢村・七久保村・南向村・飯島村・宮田村・片桐村・上片桐村・伊那村の九か町村の町村長会が合同して送出本部を設け、赤穂町役場に本部を置いて、郡建設本部の方針に基づき、三か年間に三〇〇戸移住を目的として、事業の推進にあたった。送出本部長には、赤穂町長小出良作、事務局長には、赤穂役場職員伊藤友彦(明治三六・二・一出生、赤穂町、東京高等工科学校電気科卒)が選ばれた。各町村ごとには、各種団体の代表・有力者を網羅した、推進委員会が設立されて、説明会や映画会などを開いて宣伝もおこなわれた。しかし、意外に各町村の気勢は上らず、建設本部も、経済更生の具体策を示さず、国策に従って郡の責任を果たしたいという意図だけであった。そ

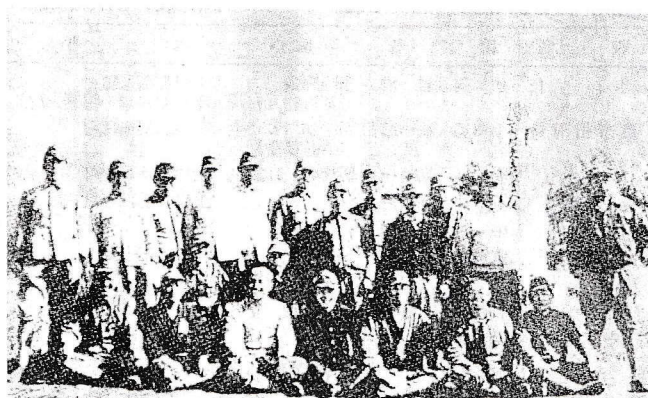
こでまず、幹部の人選を急ぎ、団長には、元宮田村長・軍人分会長などの要職にあった伊藤若雄をはじめ、農事指導員には、農会技手の小田切誠一郎と、春日勘一の二人が推せんされ、三峯郷・富貴原郷の幹部とともに、十月中旬には茨城県内原の幹部訓練所に入った。十二月末には、盛大な壮行会祈願祭が開かれ、多数の見送りをうけて、勇躍渡満の途につき、十二月二十七日ハルビンの開拓指導員訓練所に入所した。基幹先遣隊の募集は難航したが、他団が内地訓練所の八ヶ岳修練農場へたつ頃には、土屋嘉之・鎮西進・青木栄八の三人も選考されていた。

第十一次苗地伊南郷開拓団郡市別在籍数一覧

郡市	戸数	在籍		出征者		出征者の生死				在団者	在団者の生死			
		人員	死亡	人員	死亡	復員	死亡	未帰還	不明	人員	引揚	死亡	未帰還	不明
上伊那郡	70	260	7	1	33	25	7	1		219	120	83	13	3
上水内郡	1	4		1	1	1				3		3		
合計	71	264	7	1	34	26	7	1		222	120	86	13	3

『長野県満州開拓史(名簿編)』より作成

多難な発足のなかの入植 基幹先遣隊の三人は、いずれも二〇歳すぎの若手揃いだったから、上伊那班の二三人が茅野駅に集合した所で、班長には三峯郷の沢上定男を選び、八ヶ岳での一か月、他郡にひけはとるまいと、よく頑張った。一か月間の訓練から帰って半月後に渡満した。現地訓練所は、三江省樺川県弥栄村の弥栄訓練所であった。出発には、郡建設本部で、三団合同の祈願祭壮行会が開かれ新潟港から羅津へ渡り、牡丹江・林口を経て十一月下旬入所した。入所後間もなく、大東亜戦争へ突入し、入植中止のデマもあり、ここの団員から、武装移民当時の話も聞かされて、開拓に疑問を抱き、動揺した訓練生もいた。



昭和16年10月 基幹先遣隊員は八ヶ岳修練農場で三峯郷の仲間と訓練に励んだ

二月へ入ると、訓練生は次々と入植地へたち、上伊那班は最後に残った。入植問題で難航の様子だったため、沢上班長が仲間を代表してハルピンの開拓指導員訓練所へとんだ。ようやく入植地が決まって、団長の現地踏査が終わると、四月早々、幹部も弥栄訓練所で合流し、四月十七日に現地に入植式をおこなった。

これより先、二月半ばには、入植地変更の問題で幹部は新京まで出向いた。気を揉むことも重なっていたが、たまたま補充先遣隊一一人が、

十二月末には東安省北五道崗の現地訓練所に入所しており、なお、遅れて参加した経理指導員酒井朝治も、ハルピンの開拓指導員訓練所に入所していたので、他団に遅れた入植ではあったが、強い信念をもった、伊藤団長のもとで、意気軒昂総勢一八人が入植した。

入植地の概要

入植地区概況

団の入植地は、興安東省阿榮旗苗地房子地区で、北西は遠く大興安嶺に連なる山裾で、これより先に人家はなく、果しない山また山が重なっており、西北から東南に流れる阿倫河と、その支流の間に挟まれ、南東に広がって、平坦地の見える波状の丘陵地帯であった。耕土は浅く砂質壤土だが、肥沃で作物はなんでもよく出来た。近くの山は丸坊主で牧畜に適し、薪・材木は奥へ入らないとなかった。東南は富貴原郷に接し、北東は高北開拓団と境し、他はすべて山であった。地区内は沼地と大小の川が流れ、丘あり山あり、風景はすこぶる良好の地であった。交通は浜州線扎蘭屯駅から七一驛、旗公署のある那吉屯へは四〇驛、バス乗物はなく、もっぱら大車を輸送機関としていた。地区内には満人部落と蒙古人部落が三つほどあったが、戸数はせいぜい六〇戸位であった。住民感情は良く、団員との交流も密で、治安はいたって良好であった。

本隊の入植と中国人の協力

入植にあたっては、満州拓植公社が、事前に設営をしておいたので、駅から二台のトラックで現地に入ると、中国人も出迎えて、和やかな入植風景となった。とりあえず住居は、中国民の家屋を利用したが、五棟を買い入れただけで、それ以降の建物は、団の建築班が中国人の協力で第一部落（本部を含む）と第二部落の二か所へ、一棟二戸建の個人住宅二〇棟を新築した。農耕地は既耕地を買収して作業を始めたが、将来は水田三〇〇畝の開田も計画された。先遣隊は気負って本隊入植の準備にあたったが、時すでに戦局もたけなわで、容易には入植者もなくてこの年は暮れた。しかし、農耕は順

第3節 分郷開拓団

(昭和20年8月9日現在)

第十一次苗地伊南郷開拓団幹部構成

職 名	氏 名	備 考
団 長	伊 藤 岩 雄	当時54歳 (宮田村元村長・上伊那郡宮田村 軍人分會長・陸軍少尉)
農 事 指 導 員	小田切 誠一郎	明治26. 12. 5生 上伊那郡赤穂町 (農会技手)
〃 〃	春 日 勘 一	明治45. 1. 21生 上伊那郡伊那町
経 理 〃	酒 井 朝 一	上伊那郡西春近村
保 健 〃	中 村 賢 吾	
国民学校長	宮 沢 章	当時38歳 (小学校訓導) 上伊那郡赤穂町

備考欄の()内は前歴ほか
県社会部厚生課所蔵の基本調査ほかより作成

調で、中国人の積極的な協力もあり、作物の出来もよく、収穫も早目に片づいて、冬は山仕事に精を出した。翌昭和十八年には、正月早々から家族を招致し、知友縁故の入植者も増え、夏六月には、本部の伊藤友彦の引率で、赤穂町の伊藤平四郎隊長以下二五人の勤労奉仕隊もくり出されて活気が出た。

この秋、在満国民学校を開校し、郷里から宮沢章が校長として赴任した。児童数は当初十数人だったが、昭和二十年には五〇人を越え、先生も三人になった。三年後の十九年には第三部落を作り、二〇戸の個人住宅を

昭和十八年には、北海道農法(トラオを主とした機械農法)に移行した。三年目から食糧も余ったので、供出分は興農合作社(日本の農業協同組合)に納めた。越冬野菜の白菜や大根のほかに漬物も出荷したが、家畜は自家用程度であった。初年度はすべてが団の共同であったが、二年目の後半からは、部落ごとの共同に移した。計画では四年目には個人経営に入る予定であったが、本隊の入植も意に委せなかったため、団長の方針として、最後まで個人経営には移行しなかった。

開拓団の終末

団 長 まで 多少の不都合は覚悟の入植であったが、予想外に恵まれた環境で、入植三年で、すでに食糧の自給も可能になった。団員数の少ないことだけが、計画と齟齬したくらいで児童数もふえて、魚釣りに花摘みに、絵のような和やかな風景も織り混ぜ、昭和二十年の春が訪れた。その五月半ば、年配者の多いこの団に、大量の召集令状が来た。前の年の四〇五人は若い衆だったからさほど心に留めることもなかったが、こんどの大量出征には残された家族に衝撃を与えた。労力不足は中国人の応援で事は足りたが、新たに入団する者もなく、不安は募っていった。さらに、七月に入ると動員は激しくなり、八月はじめには、五四歳の団長までが召集を受けた。最後の応召は、八月十五日で、チチハルへ出たまま帰団しなかった。このとき、在籍団員二五六人、うち四〇歳以上が四割を占めるこの団から、三四人が召集されたのだった。

半数以上の犠牲
をだした難民行

この団が異常事態を知ったのは、八月二十一日、富貴原郷の奥の部落の人達が、本部へ避難して来たと

新築し、診療所も建たって、保健指導員の中村賢吾を迎えるまでになっていた。いずれも仮建築で泥で固めた壁と、屋根は羊草ぶきの粗末なものであったが、オンドルとベーチカ(床の下が煙道になっているものと部屋の間仕切りの煉瓦の中が煙道になっている暖房装置)で暖をとるように作られていた。治安が良く、現住民の部落も城壁はなかったが、満州拓植公社の指示で、十九年に二か所の部落に城壁を作った。大仕事で、中国人の工夫、延一六〇〇人を動員した。

農法は当初中国人の指導で在来(馬に引かせる犁)を使っていたが、

きであった。数日たって、那吉屯の旗公署から、「天草開拓団に全団員避難せよ。」という命令があり、大車に荷を積んで離団した。途中いくらか、武器を持った暴徒の襲撃を受け、積荷の家財道具や寝具衣料のほとんどを略奪されたが、人身の被害はなくて済んだ。ここへ来て、集結した他団の者達から暴徒の襲撃の模様を聞き、入植当初から団長の口癖のように、「我々の使命は、現住民との共存共栄が旗じるしであるから、常に融和を忘れてはならない。」と諭され、仲良くやってきたのに、どうしてまたこんなばかなことがと、みんな口惜しさに泣いた。団から持って来た僅かの食糧も食い尽し、公金も使い果たし加えて幹部も、団長・校長・若手指導員は応召し、還暦間近の小田切誠一郎一人では、どうすることもできず、団を解散して、各人ごとに生き延びることよりほかなかった。

このころ入植地の中国人からは、しきりに帰団のすすめもあって、懇意にしていた人を頼って団へ戻った者もいたが、みんな思い思いに散って行った。天草開拓団では、避難直後暴徒の襲撃で一人射殺されただけであったが、持ち物はみんな略奪されて、誰もが着のみ着のままであった。遠くは扎蘭屯まで出た者もあったが、大部分は那吉屯近くの中国人の家に身を寄せて、働ける者は作男や召使いとなって働いて露命をつないだ。九月から翌年の春頃までに流行した発疹チフスと栄養失調で、かなりの人が死んだ。十二月へ入って正規の共産軍が、暴徒を追ひ払うまでは方々で難民からの収奪もあったが、このころからは治安は落着き、親切な救いの手をさしのべてくれる中国人もでてきた。正月には賑やかにお祝いの仲間に加えてくれ、病気の世話までしてくれる者も多かった。しかし、中国人も貧しく、着物までは恵んでもらえなかった。

引揚げ命令が伝えられたのは、昭和二十一年八月半ば過ぎで、旗公署

からの布告が出された。中国人が親切に道を教えてくれ、ばらばらにチチハルへ出た。チチハルでは、日本人会が世話してくれて、戦前は高級将校達の出入りした料理屋「丸義」と満州拓植公社の需要倉庫へ収容された。チチハルは難民が雑居して、戦前の二倍以上の人口に膨れ上っていたので、食糧は不足した。団には統轄する者もなく、欠食者もあって、せつかくここまで来て、なお、病に倒れる者も出た。一部は富貴原郷の集団に入ったが、他の集団にかわる者もあり、ここからの動きはまちまちで、早い者は九月、遅い者は十一月末となった。コースは、いずれも、ハルビンから新京、錦州を経て、胡蘆島から博多へ上陸する引揚げであった。団長以下幹部全員を失ったこの団は、憎しみの刃に倒れた者は、一く二を数えただけであったが、総員二五六人の在籍人員のうち、三四人の応召者を除けば、在団人員二二二人、このうち八六人が病魔と栄養失調で命を失い、しかも、かなりの者が、チチハル収容所から胡蘆島までの間で死亡した。現地の残留者は一三人、郷里に帰ったのは一二〇人、在団者の五割強であった。

自立と更生

苦しい再発足と 現地からの引揚げは、昭和二十一年十一月までで完
殉難者の慰霊 了し、復員も二十三年秋頃には終了した。総員は

一四六人であった。しかし、団長以下幹部全員が死亡し、主軸となる団員も不帰の人となり、村に帰った者の大半が、女子供だった。そのため再出発もなかなか容易なことではなかった。送出本部は終戦と同時に解散し、書類一切を焼却したが、引揚者の援護には、ことさらに気を配って再起の道を講じ、合同慰霊祭も施行した。この中で、林菊治当時三五歳、中沢村

は、同志を糾合して、中沢村の奥地に新規入植をした。参加者は十数人で、赤穂町でも、上伊那郡としてもかなりの援助をして発足した。開墾をし、酪農もとり入れて、一時は軌道に乗るかにみえたが、結局は定着する者はほとんどなくなり、開拓地を去って行った。しかし、林菊治等再入植者が中心となり、同志の浄財を基としてこの中沢開拓地には、開拓の記念碑が建立され、関係者多数が参列して、慰霊法要も併せておこなった。その後日中国交が回復して、残留者の里帰りもあったが、個々の交流に留り、同志も各地に散って、それぞれの道を選び、顔を合わせる機会もほとんどなくなっている。すでに八〇の坂を越えた木下竹松は、「耳も遠くなり記憶も薄れてしまったから、当時のことは、送出本部にいて団のことも本気にやってくれ、いまだになにかと心配してくれる本町の伊藤友彦に聞いてくれ。」と言いながらも、忘れられない満州開拓の思い出をつぎのように語っていた。

わしは、伊藤岩雄団長が、四〇歳代で村長もやり、人格識見の優れた方なのに、自ら先んじて開拓に起ち上がり、日本の将来のために、子孫のために、満州に理想郷を建設しよう、と呼びかけた。だがこれに続く者はほとんどなかった。わしは仲間を誘い、田畑を売り払って後に続くことにした。補充先遣隊に入って入植は一緒だった。団長は中国人といえども決して差別することはなく、親交を厚くし、共に平和な村作りをするんだと言っていた。現地の人達もみんな良い人達で、いまになればあの現地の人達が恋しい。わしも八月八日の召集で団を出たが、その時は、後のこともそれほど心配にならなかった。だがいま考えると、わしもあの時四八歳、日本軍も醜いことをしたものだと思う。お国のためだと真に受けて一生懸命やった開拓団を見捨てて、自分等の家族は、戦争前に帰国させ、軍隊だって一線に残された

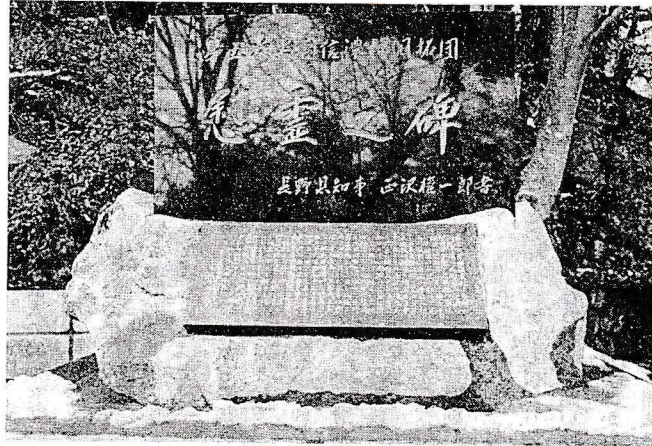
のは、開拓団の者ばかりだった。軍隊で飯を食っていた者達は、その頃、とくに逃げてしまつて、護ってくれるどころか……。あれは、軍が日本の同胞を殺したんさ。死んだ人が気の毒ですわ。犬死にだもの。そこへ行くと中国人は偉い。自分でも困ってるのに、難民を助けてくれたんだものな。いま一番淋しく思うのは、もうこの年だ。現地へ行つて中国の人にお礼を言いたい。それができないんだからなあ。

付 記 長野県社会部厚生課所蔵の基本調査と、伊藤友彦・木下竹松の記述・口述による。

20 第十一次第二木曾郷宝泉開拓団

団員は、西筑摩郡北部の木祖・日義・奈川の三か村出身者で、昭和十七年五月二十七日、北安省徳都県西和村に入植し、第二木曾郷宝泉開拓団と称した。

次 別	第十一次（昭和十七年）
名 称	第二木曾郷宝泉開拓団
入植形態	集団分郷移民
入植日	昭和十七年五月二十七日
所在地	北安省・徳都県西和村馬子良屯 （北安省・徳都県西和村馬子良屯）
送出母体	西筑摩郡木祖村・日義村・奈川村
入植人員	一六〇戸 四九〇人



第五次黒台信濃村開拓団慰霊碑

に間違いはない。当時の時代の流れはやむを得ないと認めよう。しかし、開拓民が高邁な理想として掲げ、しかも、それを現実に歩み続けた、民族協和と平和への志向は、上層部の権力者によって、ゆがめられ全く逆な方向に進んでいたのだ。今回の訪中の旅の中で、より深く実感としてその思いを噛みしめてきた。

三十六年前の悲劇の跡は今はない。しかし穆稜河にかかる鶏西大橋を渡るころから大雨がやってきた。発電所の煙突が面影を止めるだけで、街もすっかり変わってしまった。案内役の馬玉舎（牡丹江地区行政公署外事弁公室主任）が、県境通過許可書を県庁に忘れたといって、三度この大橋を渡った。仲間の霊が呼んでいると思えた。かつての逃避行を迫行する道路付近にも、いささかも惨禍の跡はない。黒台信濃村本部跡も、朝鮮系集落に変わり、わずかに煉瓦造の村公舎一棟と諏訪

神社参道の松並木が、歴史を物語る大木となっていただけであった。密山招待所の一室を借りて、元諏訪神社の神官だった滝沢寛の先導で、しめやかに慰霊祭もおこなった。全員ただ涙、涙のみだった。いまようやく歴史の流れの中で、開拓民が願望とした東洋永遠の平和を築く時がきた。あの大きい犠牲を無にしないためには、身を以て痛く感じ体得した者どもが、金や権力による差別の、見せかけの友好ではなく、心から感謝と友愛の誠を尽くして、日中両国の友誼を発展させるために努力すべきである。それが、故人に対し、また後輩に対するわたくしたちの責務と考える。わたくしもここまできてやっと、心の落ち着を見出し、堂々と胸を張って生きる心境になりました。

付記

主として、元黒台信濃村の団員遺族神田忠亥が昭和五七・三・一収録した記述により、ほかに団員湯浅梅二（明治四五・四・二四生、団員家族の三石忠男（昭和七・四・一四生）が、それぞれ昭和四七・三脱稿した回想録と、『第五次黒台信濃村開拓団の記録、惨ノムーリンの大湿原』および『長野県政史』第二巻第五編三章二節を参考とした。

参考文献

『第五次黒台信濃村 惨ノムーリンの大湿原』第五次黒台信濃村開拓団七・一〇・二九刊行
湯浅梅二、昭和四七

2 第六次南五道崗長野村開拓団

団員は、長野県各地の出身者で、昭和十二年六月二十二日、東安省密山県南五道崗に入植し、南五道崗長野村開拓団と称した。

次別 第六次（昭和十二年）
名称 南五道崗長野村開拓団

第2章 長野県単独開拓団

入植形態 長野県単位集団移民
入植式 昭和十二年六月二十二日
所在地 とうまろしやうけんなんごうどう
東安省密山県南五道崗
送出母体 長野県
終戦時人員 三〇三戸 一、三七一人

入植までの経過

団員募集と 近藤駿介知事のと、長野県は、満州農業開拓移住
幹部の選任 の国策に沿って、満州開拓移住を強力にすすめてい
た。学務部社会課を中心として昭和十一年七月、黒台信濃村に続く独自の
開拓団として、第六次南五道崗開拓団長野村の建設計画をたてた。この
計画は、開拓団員の募集と訓練を主としたもので、入植地は未定であ
った。開拓団員募集要綱のうち団員の資格については、心身壮健の者、
内地訓練終了者、渡満者一人当たり五〇円供託金納入者、という厳しい
ものであった。

入植に対する政府の保証と責任は、前年入植の黒台信濃村と同じであ
ったから、県はこれにならって、募集ポスターをつくり、信濃海外協
会・長野県市町村長会・帝國在郷軍人会長長野県支部・長野県男女連合青
年団・愛国婦人会長長野県支部・信濃教育会などを通じて募集をおこな
った。県はなんとしても団員だけでなく、幹部も郷里から送りだしたいと、
その人選を急いでいた。その結果団長には、下伊那郡下久堅村出身の平
沢千秋に白羽の矢を立てた。平沢千秋は、飯田中学校卒業後、岩手県盛
岡高等農林学校を卒業し、郷里の下伊那郡下条実科中等学校教師をつと
め、果樹園芸を取り入れて地域の青年と農事改良に尽くした気鋭の人材

第六次南五道崗長野村開拓団都市別在籍数一覧

都 市 名	戸数	在籍		昭和20年 8月8日以前 死亡者	出征 者人 員	出征者の生死				在団 者人 員	在団者の生死			
		人員	死亡			復員	死亡	未帰還	不明		引揚げ	死亡	未帰還	不明
下伊那郡	戸数 101 (29)	人 436 (29)	人 5	人 76	人 44	人 30	人 2	人 355 (29)	人 60 (21)	人 276 (6)	人 19 (1)	人 (1)		
上伊那郡	62	330	18	32	22	9	1	280	92	175	11	2		
諏訪郡	32	151	1	18	8	10		133	61	68	3			
北安曇郡	20	81		17	11	6		64	22	42				
上水内郡	13	36	1	11	4	7		24	6	18				
北佐久郡	10	51		9	6	3		42	8	34				
下高井郡	9	37		7	7	1		30	9	20	1			
南佐久郡	9	33		8	7	1		25	11	14				
東筑摩郡	8	44		4	4			40	17	23				
塩科郡	8	41	1	8	4	4		32	13	17	2			
小 県 郡	8	30	1	6	4	2		23	5	18				
更 級 郡	7	42	1	4	4	3		37	12	25	8			
西筑摩郡	5	16		4	1	1		12	4	8				
下水内郡	4	16		2	1	1		14	6	7				
上高井郡	3	12		3	1	2		9	2					
飯 田 市	2	7		1	1			6	1	4	1			
諏 訪 市	(4)	(4)		1	1			(4)	(1)	(3)				
南安曇郡	1	6		1		1		5	2	2	1			
	1	2		1				1	1					
合 計	303 (33)	1,371 (33)	28	212	129	80	3	1,131 (33)	332 (22)	759	38 (1)	2 (1)		

『長野県満州開拓史（名簿編）』より作成

() 内は勤労奉仕隊

で、陸軍少尉の肩書を持ち、その才腕と力量を買われた起用であった。
指導員は、拓務省が幹部訓練所で訓練をおえた人材から警備指導員には
宮城県出身の佐々木一男、農事指導員には勝野義信、畜産指導員には早
川元と影山吉五郎、農法指導員には谷木原清高、農事指導員には西五道
崗担当草野常喜、病院長には松田医師、学校長には三枝勇らを選任した。

第1節 全県編成開拓団

第六次南五道崗長野村幹部構成

(昭和20年8月9日現在)

職名	氏名	備考
団長	平 沢 千 秋	明治35.4.7生、下伊那郡下久堅村 (盛岡高等農林卒 教師)
警備指導員	佐々木 二 男	宮城県栗原郡畑岡村
前農事	勝 野 義 信	不 明
前畜産	早 川 元	不 明
畜産	影 山 吉五郎	北海道
農法	谷木原 清 高	千葉県千葉部
農事	草 野 常 喜	熊本県芦北郡大町村
病院 長	松 田	不 明
国民学校 長	三 枝 勇	明治21.9.8生 南安曇郡梓川村大字梓770

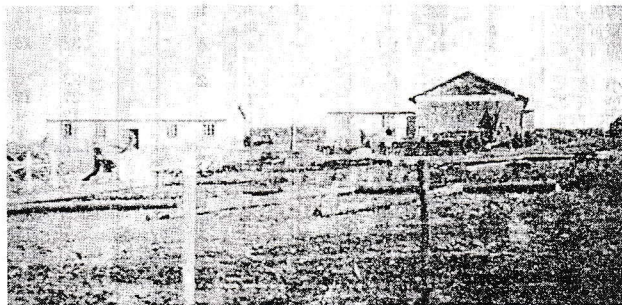
備考欄の()内は前歴ほか
原繁生編『望郷』ほかより作成

の土地二〇畝保有する大地主になれる。そのうえ愛国青年だとたえられる。これが私の燃えた心であった。しかし、両親の許しを得ることとは容易ではなかった。また、資格の一つである五〇円の調達にも苦労した。五〇円の大金はみなみのものではなく、貧農の父は工面を自家用米として倉庫に蓄えておいた飯米一〇俵を村の米穀商に売り渡したが、渡満小遣金を差し引くと、その残金は、ほんの少々であった。昭和十一年九月二日、第一次先遣隊員三〇人の結団式が長野県庁でおこなわれ、つづいて祈願祭と壮行会が催された。このあと浦野喜徳を班

まず、第一次先遣隊員の選出は、昭和十一年九月までにおこなわれた。団員の宮尾善幸は、当時の心境をつぎのように語っている。
この時満州国策移民を官民一体となつて宣伝し愛国精神で青年たちを煽りたてていた。近隣の家の青年は今日も出征だ、甲種合格だの話が噂されていた。自分の家では男兄弟四人の中で徴兵検査の結果一人の甲種合格者もなかった。軍人に志願するより満州大陸に渡つて自営農ができる。自分

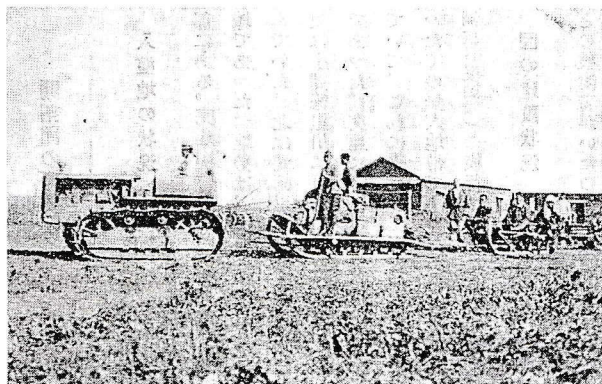
長とする一行は、九月七日、茨城県友部国民高等学校に入校して二〇日間の訓練をうけた。ここでは、食事はパンと牛乳か、麦飯に塩漬瓜と味噌汁だけ、日課は草刈りや炊事場の建築作業で朝のかけ足、体操もこたえた。九月末、友部をたつて靖国神社に参拝し、東京駅から車上の人となり関釜連絡船で新東京、ハルビンを経由、第一次弥栄村の現地訓練所に到着した。現地では各農家に配属されて実習したり、種畜場での技術習得、警備その他の訓練がおこなわれた。
入植地の決定と
先遣隊員の入植
昭和十二年

三月はじめ東安省密山県南五道崗と決まった。そのころ第二次先遣隊員三〇人も御牧原修徳農場と更級農業拓殖学校において内地訓練を終了していた。
先遣隊は、昭和十二年四月十五日に長野県庁でおこなわれた壮行会に臨み、翌日新潟を出港し、十八日清津に上陸、牡丹江・林口を経由して二十二日第一次先遣隊の出迎えをうけて現地訓練所に入所した。隊員は各部落に配属され、農家の手伝いなどをしながら実地訓練をうけた。
第二次先遣隊が二か月の訓練をおえたころ、幹部は揃って弥栄訓練所



昭和13年春 仮本部であった頃の本部風景

第2章 長野県単独開拓団



昭和13年冬 近くの虎頭の山中での建築用材の伐採風景。この日は零下30度の極寒であった
(原繁生氏談)

不況の波は農村にも押し寄せ何とかしなければと考えていた昭和十二年秋に、県から本隊募集員がやってきて木に餅の成るような話をされた。その時自分はずでに移民することを考えていたので上片

本隊の入植と家族の招致

を訪ね、隊員と入植の手筈を相談し、十二年六月二十日、平沢団長、勝野農事指導員、佐々木警備指導員、早川畜産指導員らが六〇人の隊員を引率して弥栄駅を出発し、林口を経由して新密山駅(東安駅)に到着した。一行は東安で一泊して小銃弾薬を支給され翌朝は二六結の道を本部まで歩いた。大八山の西をすぎ、うしろの神社の丘をこえて着いてみたら、広い高台に二戸建の宿舎と倉庫一棟があっただけであった。しかし全員意気軒昂、さっそく荷をおろすとその場で入植式をおこなった。

本隊の先遣隊五〇人は、昭和十二年九月に入植した。引続いて同年十一月に本隊第一次五〇人が入植

し、翌年三月には第二次九三人が入植したが、その一員として入植した団員の米山好雄はつぎのように回想している。

桐村として第一番に届けをした。つづいて七人が応募し、翌年一月御牧原修練農場に入所した。修練農場の生活は厳しく、朝は五時に起き一五分の駆け足、堤の水を割って硯をし神社に参拝、又駆け足。朝食ののち午前中は唐銀一丁で深さ三尺の天地返しの開墾、午後は場長の講話、食事は決まらずまい物ではなかった。

約一か月の訓練をおえ、大志を胸に一旦家にかえり、家族を説得して渡満の日を待った。三月初め長野市城山蔵春閣で壮行会がひらかれたあと、長野駅から汽車に乗り敦賀港へ向かった。新高丸という貨物船に乗りこみ、翌日には清津についた。入植はそれから三日あとであった。

現地に入って団長や指導員の話をきいたが、内地の募集員の話と全くおなじであった。三日間休養をとってから、各人の持ち前の仕事について団の建設にはげんだ。自分は本部の建築班で働くことになった。張り切っていたので、この年、壁は煉瓦で、厚さが三〇センチ、屋根は土でぬりあげ、外窓はガラス戸、内は障子の二重窓とし、暖房はオイルとベーチカで、零下三〇度でもシャツ一枚で暮らせた。個人家屋一八棟、一棟二戸建ての住宅一〇棟と部落ごとに畜舎も建てあげた。

昭和十三年四月、一区から十区まで各地区ごとに村づくりが始まり、各人の部落分散は抽選で決められた。このあと引き続き本隊は五月に第三次三〇人、補充隊二〇人が入植し、三〇七人となった。各区の割当ての中で、六区の大八山と決まった佐久・小島の三〇人は、これを不満として二区の東方西独を選定した。これについては本部に異論もあったが、六月に大八山より西独への移転を強行し、六区西独屯が認められた。これまでに途中退団者もでていたが、夏のころから家族招致がはじまり、翌年にかけては完了した。

開拓団の概要

入植地の状況

団の位置は、東安省密山県南五道崗で、満州北東部にある。完達山脈の南面にあたり、東西四五里、南北一二里の広大な地域であった。地勢は、山地・丘・平原・湿地・川が入りこんで変化に富んでいた。北は斐德里川をはさんで北五道崗（山形県開拓団）に接し、南東は小斐德里川に境していた。地質は黒色粘土の腐植土で、地味は肥沃であった。交通は虎林線の東安駅から本部まで二六里の開拓道路が通じていて、これに平行して東安から勃利までの軍用道路が走っていた。まったくの無人地帯であったから現住民との問題はなかったが、匪賊（反満抗日愛國隊）の横行するところで油断はできなかった。

団の建設状況

入植地は全くの無人地帯で、入植時には宿舎と倉庫が一棟ずつあったただだったが、団員の中に大工などの技術者がいたので、入植の翌日から建設をはじめ、中国人の労働者を雇入れて、建築は四年間にはとんどの公共・生産施設と個人住宅を完成した。

本部は、開拓地の中央部に置かれた。丘陵の中腹に長野村神社を祀り、麓に本部事務所・南五道崗警察署・郵便局・学校・病院が設置されていた。また、本部機構の自動車運輸部・建築部・土木部・消費部・営農運用部・現地訓練所・家畜診療所・種畜場倉庫もあり、工場は、蹄鉄工場・精米精粉精油所・建具家具製作所・製材所が整備された。

建物の大部分は煉瓦造りで、学校は間口約五五尺、奥行約九尺で、昭和十三年に開校した。三校勇校長が家族とともに赴任し、低・高学年の

二学級で授業を開始した。翌年四月一日、第一回の入学式がおこなわれた。児童数は一七〜一八人である。のちに児童数が増加したので、十七年に平屋建煉瓦造りの普通教室と特別教室を増設した。また、通年および冬の寄宿舎も設置した。児童数は七〇余人となり、校名は長野在滿国民学校とつけ、青年学校も併設した。郵便の取扱いは、十二年より十四年までは牡丹江省林口杏部隊気付の軍事郵便で、郵便料金は無料であった。それ以後は長野村普通郵便局扱いとなった。病院は、産院として妊婦を収容し、一

〇〇が安産であった。家族招致により独身者が結婚して、十五年ころより出産が増加した。出産や患者の費用は団が負担した。

昭和十二年と十三年は、主として本部関係建物と各区の共同宿舎の建設がおこなわれた。家族招致が始まった十三年から十四年にかけては、個人家屋建設が必要数の半数に達した。翌十五年は、開拓事業の基礎づくりが終わった年で、個人家屋建設も九分どおり完了した。この年は、各区により多少異なるが、経営は、団の共同から部落の共同に移行し



昭和十四年冬 トラクターは運搬用盛もひいた（原繁生氏蔵）

た。十六年には個人用の畜舎・倉庫の建設もおこない、翌十七年より個人経営への移行が始まった。

営農ならびに 農耕については、満州拓植公社（以下満拓という）が生活の状況

トラクター班を入れて開墾してくれたが、初年度は自家用野菜の作付程度であった。翌年からは年ごとに耕作を増やし、プロ農法を取り入れて能率をあげ、一戸平均畑五畝、水田四〇畝を配分して作付した。水稲のほか、畑作は大豆・馬鈴薯・大根・西瓜その他の野菜類に飼料作物で、昭和十九年度における一戸あたりの営農収入の合計額は六五二〇円で、このうち翌年の種子ほか自家用と飼料用を差引き四〇〇〇〜四五〇〇円ほどの現金収入となった。年間生活費は二〇〇〇円くらいで、この収入金には税金は賦課されなかった。米づくりは朝鮮人の特技で大部分を小作に出していた。とても自作では採算がとれなかったからである。農産物の九〇割は駐屯軍に納入し、全収穫の七〇割は畑渡しで直接軍のトラックが受けとりにきた。

家畜は一戸当たり牛馬二頭、豚・緋羊・鶏・養蜂など相当数をどこの家でも飼育して、この収入も大きかった。

入植三年目からは、土地が肥沃でなんでも作れたし、東安の関東軍第六守備隊がいくつかの大部隊を抱えていて、食糧・飼料、とくに野菜はいくらでも買入れたので生活は豊かであった。匪賊の襲撃にそなえて、部落の周囲は土塀でかこんでいたが、野火と狼を防ぐにはこの溝や土塀でも及ばないので、警戒は厳重にしていた。一番困ったのは収穫直前の狼の西瓜あらしで、これには中国人を雇って、夜空缶を叩いて追い払ったりした。

開拓団の終末

終戦当時の 個人経営に移行後は収入が安定し、開拓の喜びを味団の状況 わうようになった。しかし、昭和十八年には現地召

集がはじまり、翌年からはそれが激しくなった。関東軍が南方に移動し、その空白を補うため、適齢期にあった開拓団員は、つぎつぎに召集された。残された老幼婦女や病人は、各部落で相互に協力し、共同で作付けや収穫をしていた。昭和十九年十一月下旬、激しい爆音が東安飛行場辺りにきこえた。これは南方戦線への空軍移動のためであったが、国境に近い地帯でもあり、不安は隠せなかった。二十年七月には、男の働き手は根こそぎ動員された。このようななかで、二十年六月二十日入植九年目にあたり、団員は長野村神社前広場の丘に集合した。この日は晴天に恵まれ、盛大に祭典を挙行了した。そのとき集まった者達は来年は入植十周年にあたるので、内地へ報告を兼ねて十周年祝賀旅行を決行しようとして申し合わせた。

この申し合わせからちょうど五〇日目の昭和二十年八月九日、ソ連軍は国境を越えて侵入してきた。聞きなれない空軍機の爆音がきこえ、東安方面に爆発音がとどろき、夜になって大小の炎が天を染めた。この日、本部から各部落へ伝令が走り、ソ連の参戦を知った。午後には早くも東安方面からの避難者が、列をなして南五道崗の道路を西に進んでいった。東安の市街地が爆撃され、鉄道も爆破された。団では、このとき警察隊の指令で馬車を仕立て、東安方面に向かって難民の救援に出動した。婦女は本部に集合して炊き出しをして避難者を助けた。

開拓団の脱か

避難者の救護活動にたずさわっていた南五道崗開拓団員は、八月十日には事態が切迫したため、現地を捨てて脱出しなければならなくなった。各団員は、当面必要な数日間の食糧と、最小限の荷物を馬車に積み、子どもを馬車に乗せて本部に集結した。指揮は、警察隊の高森隊長がとり、清水光男、胡桃沢安信がこれを補佐した。早朝に集結したが、荷物の整理などで手間どり、出発は大部おくれたが、婦女子・老人・病人合わせて千余人は勃利に向かって団をなれた。前後して、日本軍の退散部隊が進み、東安方面からの後続難民が続いていた。

十日夜は土砂降りの雨となった。夜の行軍は遅々として進まず、翌日はさらに粘土質の道路は泥の海と化し、荷物は運びきれず、捨てなければならなかった。先発の軍用の馬車や自動車も路傍に乗り捨てられていた。十二日も雨であった。十三日には義勇隊大茄子訓練所で仮泊したが、近くの橋は日本軍によって爆破されていた。翌十四日は、平坦な道路を通ったが、ソ連軍用機の爆撃と機銃掃射を受けた。このとき初めて数人の犠牲者を出した。十五日も空襲が続いた。目指す勃利の町は黒煙に覆われ、鉄道も破壊されていた。そこで進路を変更して、林口への山道に入った。十六日も南へ向かってけわしい山道を進んだが、食糧が不足し、現地で調達した。林口に近づいたが、すでにソ連軍の手中にあり、危険だということであたたび問道に入った。十九日は急な山道となり、馬車や荷物を捨てて山林の中を進んだが、食糧もなく、雨で火は焚けず、連れてきた馬の生肉をかねて飢えをしのいだ。路傍に倒れた人が多く見られるようになった。二十一日は、山中の小屋で包米の粉や黄豆・高粱・小豆をみつけ久しぶりに空腹を満たした。

二十三日ころ、団員が牡丹江方面司令部陸軍中尉清水規とある印刷物

を見つけた。日本が無条件降伏をしたこと、武装解除のこと、白旗を待てなどと書かれていた。信じがたいことであったが、兵隊の口からも聞かされ、敗戦を知った。青山駅・二道河子を通ぎ、何日か歩いたが牡丹江には着かず、「老道廟」と刻まれた石の道標のある場所についた。ここにはすでにソ連兵が進駐しており、戦車が横行し、銃をつきつけられ、晴着や時計など目ぼしいものは没収された。若い娘が幾人か連れ去られ、ついに帰らなかつた。九月四日、ようやく見えた都市が樺林であった。団を出てから一か月ほどして牡丹江についたが、これも空襲で焼野原となっていた。

収容所における生活

牡丹江では、朝鮮人部落で同胞としてあたたかいはてなしを受けた。その後牡丹江駅に向かったとき、梅林に収容所があることを知り、丘陵の道を歩いた。しかし、そこは満員で野宿となった。そこで拉古に戻り収容所に入り、隣接の北道崗や黒台信濃村の人々と一緒になった。収容所では、男女を別々に分けて男子は牡丹江へ連れ去られた。収容所の配給食糧は一日二回、しづつきの高粱や大豆粕などであった。拉古収容所は軍官舎跡で、木造平屋建ての建物がいく棟もあった。しかし、窓と床板は現地人が持ち去ったので、土間に乾草を敷いて過ごした。収容所では、病人が続出した。栄養失調と疲労、子どもは麻疹やジフテリアにかかった。陸軍病院があったが、学齢以下の子どもの多くがここで死亡した。

拉古収容所には約一か月滞在したが、とても冬越しはできないので、みんなで陳情をして、十月五日にはハルビンへ移動することになった。牡丹江まで歩いて、そこから無蓋車にのせられ、途中何回か停車するたびにソ連兵の略奪にあい、目ぼしいものはみな奪われ、婦女子もねらわれて暴行をうけた。十月十二日ころハルビンに到着した。

ハルビンでは、花園小学校校庭に集結した克山美容郷開拓団員も一日前に到着していた。わずかな滞在で、そこから、さらに新京(長春)に移動した。十月十六日夕刻到着し、春日小学校で一泊したが、ここは満員のため、翌朝緑園に移動し、師範学校寄宿舎跡に入所した。新京の目抜き通りには、日本人と日本軍をのしる絵看板が掲げられ、児玉公園の將軍の銅像の首は落とされ、馬の脚は折られていた。「須太林將軍歓迎」の掲示板もあった。男子の使役で得る精白されない高粱・粟の食事、布団のない生活では、冬越しできないので、十月二十六日には奉天に出た。市内の加茂小学校に落ち着き、長野村の三区・四区・九区・大八が一緒になった。これまでに、南五道崗開拓団員は、本隊を離れて別行動をとる者、混乱の中で別れ別れになった者、死亡した者、行方不明の者が出て、人数が減少していた。ここでもようやく、奉天在住の日本人から贈られた衣類や布団で越冬することとなった。子どもを亡くした婦人たちは、市内に働きに出た。しかし、ここで発疹チフスが流行し、高齢者や子ども、衰弱した人たちが多く亡くなった。また、若い女性がソ連兵にさらわれるのを、どうすることもできなかった。中国人の中には、子どもをくれないかという者もあり、孤児となって育てられている子どももいた。

引揚と帰国準備

奉天では十二月末に鉄西に移り、軍官舎がならぶ一棟の、鉄西二〇一棟が南五道崗の宿舎となった。ここでも昭和二十一年五月初旬内地帰還の知らせがくるまでに多くの人が亡くなった。五月十五日、奉天駅から無蓋車に乗り、途中錦州に下車して、検疫や持物検査をうけ、二月ほどして葫蘆島にでた。

五月二十七日にいよいよ乗船と決まった。船は米軍の上陸用舟艇で小型であったが、清潔で食事内容もよかった。この船上で乗船前に死亡し

た代田実の水葬がおこなわれた。船は海上の遺体の回りを一周して、汽笛の音を残して遠ざかった。帰還船は、佐世保港へ入港する予定であったが、伝染病のため入港できず、博多港に向かった。博多港では、慰問団が乗船してきて、歌謡曲や踊りを披露してくれたが、喜ばなかった。五月三十一日、ついに夢にまで見た内地の土を踏んだ。翌日、新円の紙幣で一人一〇〇〇円ずつ支給された。その日のうちに汽車に乗り、長野まで二時間の旅についた。

自立と更生

生きて帰った仲間たちは、六月二日朝、列車は名古屋を通過した。開拓団員は、揃いの団服ではあったが、団を出るとき着ていたままのもので見る影もなかった。列車は木曽路に入ったが、本部の指令で途中下車をしないで長野まで行くことになった。ところが、長野駅に下車し、広場で待っていたが、県庁からの迎えは来なかった。前日、「迎え頼む」と電報を打ってあったが、土曜日の午後に届いたためであった。しかし、親切な人があって、引揚者の宿舎となっている鶴賀の住吉楼へと案内をしてくれた。

六月三日、県庁へ出向いて知事に帰国のあいさつをした。一室に通されて知事に相対した。その時の人数は一一五人くらいであった。このときは、まだ新京・奉天などに残されていた人が多かった。知事の顔を見て、一同は一斉に声を立てて泣いた。母親にもすがりたい気持ちであった。物部知事は、そのとき「自分の在任中の送迎でないのに、責任を持つことはできない」とはっきりいった。一同は泣くのをやめた。口惜しさに歯をくいしばり、うらめしさだけが残った。



昭和58.7.27 米山好雄建立の慰霊碑と観音像(米山好雄氏蔵)

この日、善光寺で物故者の追悼法要がおこなわれた。家族や知人の物故者を提出しておいたので、位牌に名が記されていた。このときの物故者の数は、五八〇人であった。後の調査では九二一人の犠牲者とわかった。裸一貫、身も心も疲れ果てて帰国した仲間、戦後の厳しい世相の中で、ふたたび自力で第二の人生を切り開かねばならなかった。生活に追われながらも死線とともに越えてきた仲間は、昭和二十三年八月十六日在満国民学校教員だった原繁生の呼びかけで第一回の長野村同窓会を開いた。最初十数人であったが、毎年八月十六日に会合し、数年後には同志同窓会として大勢の仲間が寄り集まるようになった。平沢団長が同志とともに奥野開拓組合に再度の精魂を傾けるころからは、郷里にあっては、原繁生が中心となってこの会をまとめ、五十年四月二十九日、仲間の浄財を基として、長野市雲上殿公園内に慰霊碑を建立した。この建設委員長をつとめた原は、さらに五十五年十一月三日、同志・遺族によ

びかけて手記をまとめた記念誌『望郷―生きて故国へ』を編さん刊行した。

第二の開拓事業への道

第一陣の長野村の引揚げ者は、最も悲惨な難民として内地帰還の計画にいち早く組み入れられた。

その後、続いて引揚げた者、二年、三年後にシベリアから復員した者もあって、それぞれ県下、県外に縁故を求めて散っていった。

平沢団長は、ソ連に抑留され、昭和二十三年九月に帰還した。はじめ県庁内で開拓自興会の仕事をしていたが、開拓団員の更生のためと戦後の国内の食糧事情および国の将来を思っただり度国内の開拓を考え、調査研究していた。その計画は、元団員の復員を待って実行に移された。平沢団長は仲間を連れて二十四年八月、茨城県稲敷郡奥野に入植し、奥野開拓組合をつくった。戦前戦後を通して二度の開拓事業に精魂を尽くした平沢団長は、昭和四十年八月一日、六三歳で亡くなった。後任には森山朝志(元長野村団員)が団長の遺志を受け継ぎ事業をすすめている。

奥野開拓組合について

昭和五十五年十一月、『望郷―生きて故国へ』を刊行すると、原繁生編集委員長は、奥野開拓組合を訪ねて平沢団長をしのぶ会を催した。その席上、開拓事業について、森山組合長ほか九人が当時の状況と現状を語っている。

奥野開拓先遣隊が入植したのは、昭和二十四年九月であった。平沢団長と市瀬春美は、入植前の八月に当地を視察した。その結果、ここを入植地と定め、茨城県鈴木辰雄農政課長を訪ねた。平沢団長の知名度と長野県出身の課長の尽力により入植地が決定し、九月には先遣隊一三人が入植した。二か月後に二人さらに一人の先発隊が入植して開拓をはじめた。入植地は荒地で住居もないので、まず草葺き屋根の小屋を作り、茅を敷いて、入口にはむしろを下げた。井戸は、一・二坪平方を五坪掘り

さげてつくった。その後、杉板囲いの共同宿舎を三棟建設した。やがて家族が入植してきた。四・五畳と六畳二間に七、八家族が入り、共同生活をしながら共同開墾をした。女子二人が炊事・洗濯をし、男子は開墾である。朝食前に三坪、五坪を耕し、一日中開墾を続けた。倒した木で炭を焼き、それで米・みそなどの食糧を買った。

翌年本隊が入植し、二部落・三部落に二棟を建設し、やがて一〇戸単位の三部落に分散した。共同開墾を続け、西瓜を栽培したところよくできて、これで食糧を購入することができた。二、三年後に共同経営から個人経営にしてほしいという希望が出された。団長は、開墾するには共同の力が大切なことを力説したが、結局個人経営に移行し、一戸平均二畝余の開墾をなしとげた。農業経営面では、団長の指導で西瓜の促成栽培をした。団長は、畜産に重点をおき、酪農・養鶏をすすめ、さらに昭和二十七年ころ役牛を売り乳牛を導入した。その結果、五十五年には、乳牛飼育農家が一九戸で約一〇〇頭、一戸平均五〇頭となり、日産八五〇〇〜九〇〇リットルの牛乳を生産している。養鶏は、一四戸、平均五〇〇〜六〇〇羽、養豚一戸、養蚕三戸である。当初の三〇戸から県の方針で合併し、五十七年には五四戸となっている。平沢組合長の没後、この組合の基礎を築いた功績とその徳をたたえ、開拓地に胸像を建立した。

付記 主として、元南五道岡長野村長野満国民学校教師原繁生^{大正六、七、八}、島内^{松本市}が、昭和五七・三・四収録記述したものによるが、ほかに

参考文献 『望郷』昭和五五・一・三刊行、編集責任者 原繁生、満洲開拓長野村同志会刊行

3 第七次中和鎮信濃村開拓団

団員は、長野県各地出身者で、昭和十三年三月二十二日、浜江省延寿県中和鎮に入植し、中和鎮信濃村開拓団と称した。

次 別	第七次（昭和十三年）
名 称	中和鎮信濃村開拓団
入植形態	長野県単位集団移民
入植式	昭和十三年三月二十二日
所在地	浜江省延寿県中和鎮
送出母体	長野県
終戦時人員	二八二戸 一一六四人

入植までの経過

選出当時の状況と先遣隊 昭和十二年度に第六次南五道岡信濃村を送り出した長野県では、農村経済更生運動のなかで、さらに強力に分村移民の計画をすすめた。全県的にはまだ移民熱はそれほど高くなかったが、前二回の県単独移民団の成績が良好であったので、大量移民の送出の機運の醸成をはかった。県では、十二年二月二十五日に十三年度の第七次信濃村の団員募集のために、「満洲信濃村建設の策」を発行した。開拓団の営農計画の概要を畑作を主として水田と牧畜を加え、

自給自足の有畜農業を営むものという内容で、土地は一戸あたりの標準所有面積が約二〇畝、その内訳畑九畝、水田一畝、林野・牧草地九畝、